

## 舞踊作品の「存在」は可能であるか —その基盤となる「動き」の同一性 についての考察—

東京芸術大学 柿沼 美穂

舞踊作品は、作品の同一性という点においても、完成度という点においても、さまざまな芸術ジャンルのなかで、最も危うく脆弱ということが出来る。上演ごとに振付が改変され、十分な記録をとることも容易ではなく、作品の完成形も確固としたものがない。これは、ルカーチやオスカー・ベッカーの言葉を参照しながらガダマーが指摘することでもある。また彼の論述に従えば、舞踊作品のみならず、美的対象の統一性が体験の多様性へと分解するのは、体験美学の必然的な帰結とされる。

たしかに、この考え方は実際の現象を説明する原理としては極めて妥当であるように思われる。しかしながら、この観点はあくまで鑑賞者の作品に対する「理解」や「解釈」といった面を説明するものであり、実際に制作し上演する立場の人々、すなわち振付家やダンサーたちの観点ではない。実際には、振付家もダンサーも、「舞踊作品は、共同主観的な共通理解によって成立するだけで、実際にあるのは一回ずつの個別的な上演だけである」とは考えていないからである。もちろん、舞踊芸術の制作者そして上演者は、舞踊という芸術が上演される際の「一回性」について、観客以上に深く理解している。しかし彼らは同時に、個々のリハーサル、そして上演の度に、「同じ作品」を踊っているという明確な意識をもっているのである。このような意識はまったくの「錯覚」なのだろうか。

彼らの意識において特徴的であるのは、鑑賞者から見れば同じではありえないはずの個々の動きに関して、昨日の公演でも今日の公演でも「同じ動きをしている」（あくまでも同一と見なせるだけの同質性を有するという意味で、ではあるが）という意識をどこかで確実に保持しているということである。これは、鑑賞者の観点からは「同一性」が非常に脆弱に思われる、インプロヴィゼーション（即興）を中心とする作品を上演する場合においても変わらない。少なくとも彼ら（制作者や上演者）は、一つひとつの個別的上演において、どの部分の動きが「同じ」で、どの部分が「異なっ」ていたかを、明確に把握しているのである。

もちろん、このような個別的な動きの同一性の意識が、直接に「舞踊作品」へと結び付けられるわけではない。けれども通常、「二度と繰り返すことができない」と見なされる動きを、「繰り返し可能」なものとして彼らが捉える根拠は、考察されるべきではないだろうか。

実際に舞踊を上演し、現象させる「遂行」者としてのダンサーの立場において、鑑賞者と異なる点は、彼らが「観察する」者でなく、「行為する」者であるということである。もちろん、ダンサーが「観察しない」わけではない。しかし、何よりも彼らにとって重要なのは、自らの踊りをよく遂行することである。

それゆえ、ダンサーにとって最も重要なのは、観察される第三者の「動き」ではなく、自分自身の「動き」である。この自分自身の「動き」は、観察される第三者の「動き」とは大きく異なる特徴を有する。アンスコムが述べているように、自らの動きは、いわゆる観察を通じて捉えられる現象としてではなく、「自らの意識に直接与えられる」。すなわち、人は自らの動きを直接知ることが可能なのである。通常それはわれわれが、ごく自然に受けとめていることであるが、実は非常に例外的なことである。

観察者の立場からすれば、他人が同一の動きを二度繰り返すことは不可能である。「観察に基づいて」知ることのできる運動の「形態とその同一性」は再現不可能だからである。しかしながら、行為者の立場からすれば、「観察に基づかない」「自らに直接与えられる知識」として同一の動きを複数回遂行することは可能なのである。なぜなら、このようにして「観察に基づかない知識」として「身体図式」を通して知られるものは、いわゆる「外側の」鑑賞者の立場から、すなわち「観察に基づいて」知ることのできる運動の「形態とその同一性」とは異なるものであるからである。それは動く人、すなわち行為者が「自らの身体図式によって把握する運動そのもの」と「その同一性」ということになるからである。

もちろん、このような行為者としてのダンサーによる「動き」の「同一性」の把握が、直接「舞踊作品」の「同一性」を保証するわけではない。動きの断片だけでは、その「動き」が舞踊であるかどうか、また「舞踊作品」という何らかの統一性を有する全体の認識にどのように関係するか、という二点が不明だからである。

しかしながら、観察者の立場からはその「一回性」が強調される「動き」であっても、行為者の立場からは「同一性」が認められるということ是非常に興味深いことである。このようなことが、舞踊において「作品」が、（鑑賞者の立場からすれば「勇み足」的に）認証される際に、何らかの影響を及ぼしているとも考えられるからである。それは、実際のわれわれが「観察者」であると同時に、程度の差はあれ「行為者」でもあるからである。